

自然の警告か、逆襲か

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

先ごろ、全国あちこちで熊が出没し、熊に危害を加えられたことが原因で亡くなった人数がすでに10人を超えていた。冬眠を控えて集中的に餌にありつくためか、人の出した残飯などの味が忘れられずに人里、街中に現れたのか、合理的な理由はわからないが、いずれにしても危険な事態であるのは間違いない。熊よけの鈴をつけているから安心だなどと言えない状況にあるようだ。

川を遡上してきた鮭を熊が捕まえるシーンをよくTVなどで見るが、その遡上量には海水温の変化やプランクトンの状況などが大きく影響するだろう。鮭以外にも山のなかで熊の生存に必要なハチミツ、ドングリ、昆虫、山菜、果物など、何れも気温や降雨など自然界の影響を大きく受けるものばかりである。

筆者もかなりの山里育ちで、子供のころには炭焼きや木こりなど山林作業で生計を立てていた人が多くいた。父などもその類で、田植え、稻刈りなどの農繁期を除いて朝から晩まで炭を焼いていた。筆者の大学での学資の6~7割は炭焼きの成果でもあったろう。広葉樹で覆われた山中に窯を作り、一定区画を処理してしまうと次の山にて同じことを繰り返す毎日であった。炭を焼き終わったあとには杉や檜を植えていった。国の補助金で有用木材の植林が広範囲に行われた。筆者なども大学紛争中には神戸にいると生活費がかさむので、実家に帰り、植栽、下草刈りなどのアルバイトをしていた。そのころに筆者も関わった山林は50年以上もたつと杉や檜が大きく育ち、木材として十分に利用できるはずであったが、何のことではない、そのような急峻な山から安価に木材を切り出すには採算が取れない。つまり植栽によって鬱蒼とした山林はできたが、その木々の下は薄暗く、草木もほとんど生えない。熊のみならず鹿も兎も好きなドングリや木の実など全く消え去ってしまった。

植林が国の補助金で頻繁に行われていたころ、数十年後にその木材として売れたら、村と住民にはかなりのお金が入るとの目算であったが、人口も減り筆者も含めて若者が街に出ていき、昔華やかだった山仕事を担う者がほとんどなくなってしまったのである。結果としてせっかく植えた杉や檜の林も全くと言っていいほど手入れがなされておらず、荒れ果てているのが現状である。熊や鹿、狸にとって、筆者の田舎の山々が非常に住みにくい場所と変わると、止むを得ず彼らは一定の境界を踏み越えて人里や山が近接する街中に出没するようになる。子供のころ、猪は常日頃出没したが、狸や鹿はめったに見ることがなかった。しかし最近では比較的低木の柿などは殆ど狸に、野菜などは鹿に食べられてしまうようになって、致し方なくかなり背の高い囲いでもって畠を保護しなければならなくなっている。

現在の状況は、昨日今日ではなく、少なくともここ50年程度かけて生まれてきているのではないだろうか。熊に遭遇して襲われ亡くなつた方々にはお悔やみを申し上げる以外に言葉もない。生身の熊はゆるキャラのくまモンでもプーさんでも、ましてやパディントンでもない。やはり人にとっては獰猛危険な動物であり、駆除もやむを得ないだろう。だからと言って山林に住む熊を根絶やしにす

することは不可である。とすれば、人と野生動物の繩張り境界を今一度再構築することが必要なのではないだろうか。もちろんそれは柵を作ることでもなく、鉄条網を張り巡らすことでもない。少なくとも野生動物が人の領域にまで餌を探し出てこなくてもいいように、今、何をなすべきか、野生動物に対する十分な調査と研究、そして短期的、長期的な対応方法の検討が求められているのではないだろうか。言うは易し行うは難しとは重々承知ながら、ニュースにふれるたびに思っている。

